

平成30年6月22日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25870068

研究課題名(和文) 野生動物資源の贈与交換に潜む動物とのパートナーシップ

研究課題名(英文) Partnership with animals in the gift exchange of wildlife resources

研究代表者

山口 未花子(YAMAGUCHI, Mikako)

岐阜大学・地域科学部・助教

研究者番号：60507151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：互酬性に基づく贈与交換は北方狩猟民と動物との関係において重要な行動の基盤となる原理であり、進化的にも重要なファクターであることが研究代表者のこれまでの研究から示唆されてきた。本研究では、動物からの贈与として獲得された肉や毛等の資源が人間社会のなかでどのように贈与分配されるのかという点に注目し、生態、社会、象徴といった側面から分析するとともに、日本と北米など地域間の比較を通じてその普遍性と多様性についても検討した。この中で、動物資源が人間社会と動物、自然環境を含めた循環のサイクルの中で一時的な預かりものとして位置づけられ、贈与交換されることで循環サイクル自体が維持されていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：It has been suggested from previous research that the gift exchange based on reciprocity is a principle that serves as the basis of important behavior in the relationship between northern hunter and animals. In this research, I focus on the way of the gift exchange the resources such as meat and hide as a gift from animals how distributed in human society and analyze from the aspect of ecology, society, symbolism, also examined its universality and diversity through comparing between the Japan and north America. Then it become clear that animal resources are positioned as temporary deposits in the cycle of circulation including human society, animals, and the natural environment, and circulation cycles themselves are maintained by gift exchange.

研究分野：文化人類学

キーワード：狩猟 人と動物 地域比較 現地調査 人類学

1. 研究開始当初の背景

本研究計画の背景として、研究代表者が博士課程在籍中から継続して行ってきたカナダ亜北極針葉樹林対の狩猟民カスカと動物との関係に関する研究がある。このなかでカスカの人々が、北方の寒冷な気候という厳しい生存条件の下、知識や技術といった独自の文化を通して環境へ適応してきたこと、獲物や自分を助けてくれる動物霊といった個人的な動物との関係を基礎とするカスカ社会の特徴が明らかになった。

こうした動物との個人的な関係は、物理的には狩猟活動を通じた動物の肉や毛皮の利用である。この動物資源の利用に関わる知識や技術は、動物との超自然的な関係や動物に関する認識と切り離されたものとして形成されてわけではなく、むしろ狩猟動物やヘルパーである自分の動物霊との交渉の結果として動物側からの(肉や毛皮の)贈与を引き出すことが重要な技術の一つとなる。

ただし申請者のこれまでの研究は、動物を捕獲するまでの活動に焦点を当てていたため、捕獲された動物資源が、カスカ社会の人と人との関係のなかでどのように消費されるのかについてはほとんど取り扱ってこなかった。しかしこれまでの調査の中で、狩猟によって獲得された動物資源が人間関係を通じて活発に分配され経済的・社会的な意義を持つだけでなく、高い価値を持つものとして、また伝統文化を維持するための道具としても活用されていることが示唆されている。

こうした点からも、カスカ社会における人と人との間の動物資源の贈与交換に注目した研究をすることで、動物資源の循環をより広く捉え直す必要があることから、本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

本研究計画では人と人との関係のなかで、どのように動物資源が贈与交換(分配や流通を含む)されるのか、その過程で互酬性に基づく動物との関係が意識されるのかあるいは意味を失っていくのかを明らかにし、動物資源の贈与交換を社会的に位置付けることを第一の目的とする。

さらに普遍性と環境等による差異の地域間比較をするため、コミュニティで動物資源の分配を行う社会との比較を行う必要がある。そこで比較対象として、宮城県牡鹿半島の小型沿岸捕鯨、八重山地方のイノシシ猟の事例も検討する。申請者の修士論文研究の対象であった小型沿岸捕鯨社会は、鯨という自然資源に依存し、その捕獲において生物学的な知識だけでなく鯨との結びつきを必要とするという点で北米狩猟民と通じる生業形態を持つ存在といえる。

八重山地方のイノシシ猟に関しては、昔から行われてきた猟であり、動物との駆け引きが重要であることが先行研究から明ら

かにされているものの、地域内での消費に関する研究はほとんどみられない。しかし申請者の予備調査からは、島民の多くが家族単位でイノシシ猟の縄張りを所有して、捕獲したイノシシは分配や共食によって消費されることが示唆されている。つまり野生哺乳動物の捕獲が伝統的に継承された重要な生業となっていること、地域の間人関係を通じた分配が見られるという特徴を共有している。これらの事例を比較検討することで、人間の行動基盤ともいえる互酬性に基づく贈与・交換の普遍性と地域差を明らかにする。この際にそれぞれの社会における捕獲対象動物との関係や捕獲の方法が、どのように影響を与えるのかについても検討し、人間が資源を分かち合おうとする心がどのようにして形成されたのかについても考察する。

3. 研究の方法

動物資源の利用と贈与交換の文化・生態学的分析を行うため、次のような計画の下研究を遂行する。まず、申請者がすでに調査の拠点としている、カナダ、ユーコン準州・沖縄県西表島、宮城県牡鹿半島における野生哺乳動物の狩猟とそれによって得られた資源の贈与交換についての一次資料をフィールド調査によって収集する。さらにこれまでのデータと合わせて地域間で比較し、文化的背景や贈与交換の為された文脈にも配慮しながら分析を行い、贈与交換という活動と自然資源獲得の方法との関係や普遍性と差異がどのように生まれるのかを明らかにする。具体的には以下の手順にそって行う。

1; これまでのフィールド調査の一次資料を整理し、カスカ社会における贈与交換についてまとめ、自然資源とそれ以外のものについて分類する。必要に応じて調査を実施し、動物資源の分配の参加メンバー、分量、時期などの項目についてのデータとともに規範や文脈についても聞き取り調査から明らかにする。

2; 西表島におけるイノシシ猟で捕獲されたイノシシの解体から加工や分配、販売について数量も含めて明らかにする。

3; 日本小型沿岸捕鯨についてのこれまでの調査や文献、フィールド調査から、鯨肉の流通、贈与についてまとめ、それに纏わる規範や宗教実践についても明らかにする。

4; 地域間の比較を行い、狩猟活動によって獲得された資源がどのようにして贈与交換されるのかを明らかにする。

4. 研究成果

25年度は、5月に宮城県石巻市で調査を行い、地域の祭りにおいて地元で捕獲された海産物が重要であることや漁業が、祭りのあり方に影響を与えていることを明らかにした。また8月にはカナダ、ユーコン準州で、狩猟採集の知識と経験を豊富に持つ古老に対

し、集中的な聞き取り調査を実施し動物との交渉や動物資源の利用についての知見を得ることができた。さらに5月～6月にかけて展示「極北の狩猟民カスカ」展および、シンポジウム「狩猟生活の世界」を開催し研究成果を広く市民に伝える取り組みを行った。シンポジウムでは北九州市立大学および京都大学の研究者をまねき、それぞれのフィールドにおける狩猟の実践について報告を得るとともに、ディスカッションの時間を設け、世界の狩猟生活の比較を行うとともに、その本質についても議論を深めた。さらに6月には日本文化人類学会代47回研究大会で「北米先住民カスカと動物の殺し殺される関係」とのタイトルで、8月には国際人類民族科学連合世界大会(マンチェスター大学)で「Subsistence and religion in the Oshika Peninsula after Tsunami disaster」というタイトルで発表を行った。このほか沖縄県八重山地方のイノシシ猟に関する短期の調査と資料の整理と検討を行った。またこれまでのカナダでの研究成果を単著『ヘラジカの贈り物』(春風社)として出版した。

26年度は、カナダ先住民カスカの古老を中心とした狩猟及び贈与についての参与観察を実施した。この中で、古老が深刻な病気になる際に、コミュニティ内で活発に贈与が起きることが観察されるなど、重要な知見が得られた。また、この中で動物、とくにヘラジカの重要性が改めて確認された。

西表島におけるイノシシ猟調査では、罠をかける際にイノシシの気持ちを読み取るポイントを教わるなど、動物との相互交渉を絶えず行いながら猟を行っていることが明らかになった。また、分配についても狩猟者が平等に分配すること、古くから肉が販売されていることなど新たな知見が得られた。さらに、捕鯨者を輩出する宮城県石巻市の被災地における生業についての調査を通じて、いまだに漁場や港が復旧していない中で、地域の間人同士の助け合いが震災前よりも広い範囲で行われるようになり、個人経営者や高齢者などの弱い立場にある漁業者が操業することを可能にしていることが明らかになった。この中で、日常的に行われている海産物の交換が人間関係の構築に大きな役割を果たしていることが示唆された。

さらに、研究成果を広く発信するため、東京のスペースキチムにおいて市民を対象とした展示『ヘラジカの贈り物』及び、映画監督・写真家の本橋成一氏との対談「動物を殺してたべること」を実施した。展示制作は岐阜大学の学生や企業のデザイナーとの協働によって実施し、教育や社会連携という点でも成果があった。また成果の一部を反映させる形で共著および共編著を出版した。

27年度は、まずカナダ先住民の儀礼と食

における野生動物資源の役割に着目しカナダ先住民カスカの葬儀における食事や、隣接するトリングット族の結婚儀礼における食事について調査を実施した。このなかで、野生の肉だけでなく植物なども重要な役割を果たすとともに、それらが誰の手作りであるか、といった入手や加工の文脈が重視されるという点については明らかになった。さらに、前年度から継続して、5月には宮城県石巻市の祭りと生業について、12月には沖縄県西表島のリュウキュウイノシシ猟における肉の流通についての聞き取り調査を実施した。また、岐阜県においては自らも狩猟を実施することで、野生動物の肉を獲得し、消費することについての心理的な側面についても調査した。

また、5月にはJSAC 2015 Conference in Tokyoへ参加し発表とディスカッションを行ったほか、8月には2015年度文学・環境学会全国大会においても発表した。さらに、雑誌『現代思想』への論文の寄稿、シンポジウムでの特別講演やワークショップの企画・実施などを通じて、狩猟採集と資源利用に伴う文化に関する知見を広く一般にも公開した。

28年度は、研究代表者の出産のため当該年度に予定していたフィールド調査は実施できなかった。ただし、日本国内において狩猟実践を行うことで、これまでのフィールド調査で得られた知見を経験的に理解することが可能になった。特にこの経験を通じて動物を殺すことと、そこで生じる感情に関して、動物の反応も踏まえたプロセスを把握することができた。

こうして得られた知見を用い、動物を殺すこととこれによって生じる心の動きについて、カナダ先住民カスカと日本とを比較しながら検討し、殺しに伴う感情が動物とのかかわり方に依存する傾向があることを指摘した論文「狩猟と儀礼 動物殺しに見るカナダ先住民カスカの動物観」が、共著『動物殺しの民族誌』に収められた。また、カナダ先住民カスカのデータの一部が共著『フィールドノート古今東西:FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ13』に収められた。さらに、カスカと動物の関係についての論考が『新版 文化人類学 のレッスン』(梅屋潔・シンジルト編)に収められた。

またこのほかにも共同研究への出席を通じてモノ研究を通じた動物資源へのアプローチという新しい視座を獲得したほか、関連文献の渉猟、これまでに収集した資料のまとめや検討を行った。

29年度は、カナダ、ユーコン準州の先住民カスカ及びトリングットを対象とした現地調査を実施し、動植物などの自然資源や狩猟採集に関する知識や技術について調査を実施した。このなかで、春季の植物資源利用についての新たな知識を得た。また、通過儀礼である葬儀についても調査する機会に恵まれ、葬送儀礼の準備や当日の進行、

人々の交流を通じてカスカ社会の構造の一端が明らかになるとともに、儀礼における動物の象徴性、儀礼食における動物資源の利用から、動物がカスカ社会を表彰すると共にもてなしなどにおいても高い価値を付与されていることが示唆された。トリングット族に関しては、歌や踊りを通じて文化を継承している若者へのインタビューを行い、そうした活動を通じて自らのアイデンティティを構築していること、その過程で利用されるモノとしての動物資源が重要である点を明らかにすることができた。また、西表におけるイノシシ猟についてもフィールド調査を実施した。このなかで、これまで対象にしてこなかった、内地からの移住者による狩猟についても調査を行い、島内出身者とは異なる方法ながらも狩猟やイノシシの消費活動を通じて土地や地域コミュニティに根をおろしていくような様子が見られた。さらに、岐阜における狩猟実践を通じて、経験的な狩猟に関するデータも収集した。これらのデータに基づき論文の執筆及び、国際学会及び国内学会における発表を積極的に行った。また、市民向けのイベントや講演も行い、広く成果の普及に努めた。

以上、5年間の本研究において、概ね順調に一次資料の収集、分析、比較を実施することができた。特に動物資源利用において自分自身が資源として利用する動物との関係に於いて連続性が重視され、儀礼や宗教が必要とされる点が明らかになった点が重要である。一方、金銭でやり取りされる毛皮などにおいては、動物との関係はそれほど重視されなくなる傾向があることもわかった。ただし貨幣経済の伝統が長い日本では、金銭でやり取りされる肉にも、土地や人間関係を維持するという役割が付与されていた。このことから食べるという行為が動物感に与える影響が特に大きいという可能性も指摘できる。また、肉や毛皮といった、「モノ」となったあとにも、動物という象徴性は失われることがなく、儀礼食や贈与において特にモノに潜む「動物性」が意識されていることも明らかになった。今後はこうした、動物の象徴的な「モノ」性についても検討する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

山口未花子「動物を夢見る-北米狩猟民カスカにおける動物への恐れから見る対称性」2016、『現代思想』44-5、査読無

〔学会発表〕(計 7件)

山口未花子「北米先住民カスカと動物の殺し殺される関係」日本文化人類学会第47回

研究大会、2013年06月08日、慶應義塾大学

山口未花子「Subsistence and religion in the Oshika Peninsula after Tsunami disaster」IUAES(国際人類民族科学連合)2013 World Congress, 2013年08月06日、マンチェスター大学

飯塚宜子、山口未花子「北米先住民の自然との関わり方に学ぶ環境教育実践」日本環境教育学会第25回研究大会、2014年08月01日~2014年08月03日、法政大学

山口未花子「Part of the Moose: Maintaining continuity between the Kaska and the Moose through hunting activity」2015 Annual Conference in Japan (in conjunction with JACS and JCIRN)(国際学会)、2015年05月20日~2015年05月23日、カナダ大使館

山口未花子「動物のいのち:動物殺しをめぐるカスカと日本の比較」第21回文学・環境会全国大会、2015年08月22日~2015年08月23日、2015年08月22日~2015年08月23日

山口未花子「先住民カスカの生業を通じた変化と現状」カナダ学会、2017年

山口未花子「西表島のイノシシ猟に見る土地とのつながり:地域・年代・出身の違う猟師の比較から」生態人類学会、2018年3月

〔図書〕(計 8件)

山口未花子『ヘラジカの贈り物』2014、春風社

山口未花子、他『無形民俗文化財が被災すること』2014、新泉社

山口未花子、高倉浩樹編『食と儀礼をめぐる地球の旅』2014、東北大学出版会

山口未花子、他『展示する人類学』2014、昭和堂

山口未花子、他『子供たちは多様な地域に何を学ぶのか』JACS Collaboration series No.9、2015、地域研究コンソーシアム

山口未花子、他『フィールドノート古今東西』2016、古今書院

山口未花子、他『動物殺しの民族誌』2016、昭和堂

山口未花子、他『新版 文化人類学のレッスン:フィールドからの出発』2017、学陽書房

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 未花子 (YAMAGUCHI, Mikako)
岐阜大学・地域科学部・助教
研究者番号：60507151

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()